

— 写真訪問 —

## 根室測候所の沿革

根室測候所は昨年（平成5年）8月、根室地方合同庁舎に入居した。

新庁舎はこれまでの根室測候所敷地内に建設されたので、移転で所在地が変わることなく業務が継続されることになり、この位置での気象観測は今年109年目に入った。

同じ場所で既に100年以上のデータを蓄積している根室測候所であるが、その創立は更に7年さかのぼって1879年（明治12年）7月である。

札幌農学校教師ウイリアム・ホイラーは北海道における気象観測の重要性を説き、北海道の最東端または北東沿岸に気象観測所を設立する勧告をした。これをうけた開拓使は民事局地理課が開拓使根室支庁の敷地で気象観測を開始した。これが根室測候所の始まりである。最初に観測を始めた場所は現在地より北に0.6kmほどの根室港よりのところで、今そこには観象台跡という標柱が立っている。

当時の観測はスミソニアン方式とよばれるもので観測時間や単位が現在と異なっており、定時観測は1日3回7時、14時、21時であった。当所にある観測原簿の第1行目すなわち1879年7月1日7時の欄には気温59.2°F、気圧29.738インチ、相対湿度94%、雲量80%などと黒インクでていねいに記入されておりページの一番下には観測者として初代所長の星野義信のサインがローマ字でかかっている。

その後開拓使が廃止され測候所は根室県の所管となり、その時はじめて根室測候所という名称になっている。そして創設7年目の明治19年に現在地に庁舎を新築し移転した。

移転先について「根室千島両国郷土史」には「海浜を距る7町余の高所にあり、四方開豁、一つの障害なく測候所の位置としては最も適當の地とす。」と評されているそうで100年後の今も基準気候観測所として通用するこの地を選定した先人は慧眼である。

その後北海道庁所管を経て昭和13年に国営移管、中央气象台根室測候所となり、翌年札幌管区气象台の設置で再び根室測候所の名称になって現在に至っている。

現在地に来てから今回の合同庁舎まで庁舎は大きく5回新築または増改築されている。

最初の庁舎は写真を見ると木造平屋の一見民家風の建物で屋根の一部に測風台があり建物のそばに時報鐘柱が立っている。これが明治20年代使われた。

第2期の庁舎は旧庁舎が増築されさらに二階建ての測風建物が新築された形で明治31年完成である。

第3期は昭和4年に完成した本造亜鉛葺一部三階建ての当時としてはモダンな建物であった。昭和16年からは測風気球観測が始まり昭和19～20年に気球準備室、気球追跡観測室が建てられている。

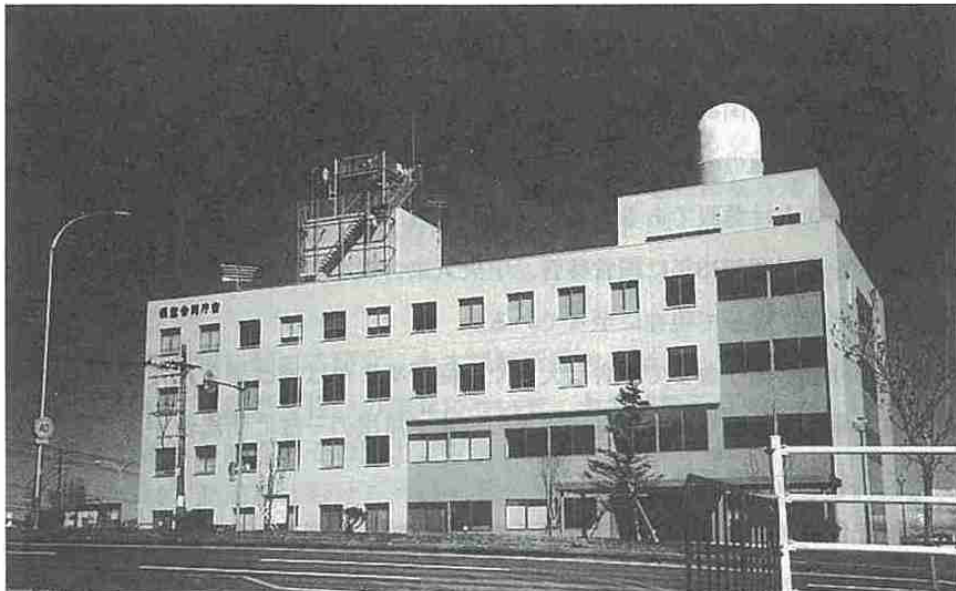
ここに載せた写真は多くの人の記憶にある根室測候所の姿だと思うが、これは第4期の建物で昭和31年の完成である。翌年には課制がしかれ技術課の中に高層係ができ国際地球観測年を契機とした高層気象観測が

開始されている。高層係はその後昭和36年に課に昇格し現在と同じ業務、技術、高層の3課制になった。さらに装置等の充実で昭和40年に写真の右側平屋の高層観測室が増築されている。



業務が急速に拡大充実し職員数も多かった時期のこの建物も30数年の歳月を経て役目を合同庁舎に譲り昨年9月に取り壊されてもう見ることはできない。

新しい根室地方合同庁舎は鉄筋コンクリート4階建てで屋上の2つの塔屋の上にそれぞれ測風塔及び高層観測のアンテナのドームがある。庁舎は1階が法務局、2階が税務署、3階が検察庁、測候所は4階にありフロアを全部占めている。そのほか測候所の占有部分として地震計室が1階にあり、敷地内には露場と別棟の高層観測用水素ガス施設がある。



この庁舎の建設にあたり露場は北に約50m移動したが高さはほとんど変わっていない。しかし風速計の高さは大きく変わって旧庁舎時代の11.7mから工事の都合で一時仮設のパンザマストに移された後、最終的に93年8月26日新庁舎の測風塔に移され地上高29.1mになった。これにより風の統計が切断されているので

データを使うに当たっては注意が必要である。

新庁舎は道々根室半島線に面し4階の測候所は道路側が事務室、裏側に技術課と高層課の現業室が並び北向きの大きな窓からは坂を下る町並みと根室港、その先に広がる根室海峡、視程が良ければ国後の島影さらには知床の山々まで望まれる。

根室測候所の管轄は根室支庁管内ということで遠くに見える知床半島の羅臼側は管内に入る。知床は山がけわしく海岸線まで迫っており、過去に局地的な突風で大きな海難を起こした気象の激しいところである。一方根室市のある根室半島の地形は対照的に100m以下の台地状の起伏のゆるやかな半島である。根室地方の気候の最も特徴的なことは晩春から夏にかけての低温と霧である。日本で一番遅い千島桜の花見が終わった頃から霧の季節になり気温は平均で札幌より5℃あまりも低くなる。また7月、8月の日照時間は同じ根室の12月よりも少ない。

しかし今年は全国的に猛暑で根室でも記録的な夏であった。普通は2年に1回位の真夏日が今年は3日、8月の平均気温は平年より3.0℃高く、日中霧のかかる日も少なく日照時間は平年比144%であった。根室にとっては恵まれた夏であったと言えよう。これだけ夏が暑いとこの冬が気になるが、例年であれば12月中旬頃港が凍り始め根室海峡に流氷が姿をみせるのが2月上旬、去るのが4月はじめである。

このように気候の厳しい根室地方は酪農以外の農業にあまり適さず、産業の中心は水産業である。しかしこれを取り巻く環境も厳しいものがあるようだ。管内の人口もこのところずっと微減の傾向から抜け出せないでいる。

逆にみれば急激な都市化にさらされることもなく、町のすぐ近くでもまだ多くの自然が残されている自然の宝庫である。最近自然保護に社会の関心が集まっているが、注目されている貴重な動植物に逢えるところも少なくない。また直接自然の恩恵にあずかる山菜採りや釣も往年を知るものにとっては物足りない状況になってきているとはいえ、まだまだ多くの人が楽しめる容量があるようだ。

測候所にとっても都市化によって観測環境が大きく変わるという心配は今のところなさそうなので気候変動を監視する基準気候観測所としての任務を永く将来にわたって果たしていけるものと考えている。

(根室測候所長 辻 雅彦)

